

ユニバーサルシティズンシップを育む 国際コミュニケーション学習自作テキスト使用の効果について

村上 直子 松尾 砂織 箕島 隆 風呂 和志
妹尾 進一 柳生 大輔 岡 芳香 三田 幸司
加藤 秀雄 小早川善伸 中島 敦夫 林原 慎
掛 志穂 君岡 智央 深澤 清治 平川 幸子
長松 正康 山本 透

1. はじめに

本学園は、文部科学省の研究開発指定校として平成15年度から領域「国際交流学習」と領域「マルチメディア学習」、平成18年度からは小学校と中学校においては新教科「国際コミュニケーション科」を設立してその題材開発とカリキュラム開発を継続的に行ってきた。この中で、情報リテラシーと交流リテラシーを両輪とする国際的コミュニケーション能力を幼稚園から中学校までの12年間という一貫教育によって育むことを目的とした。さらに、児童・生徒向けとして、12年間の学習の手引きとして学習内容を1冊にまとめた自作テキストを制作した。(幼稚園においては教師向けの実践の留意点を記載)

2. 研究の目的・方法

本研究の目的は、これまで培ってきたカリキュラムをもとに作成したテキストを使用した単元の効果を検証し、よりよいテキストの在り方について探るものである。

検証の方法としては、幼稚園については、国際交流とマルチメディアについて実践するにあたっての留意点が妥当かどうかの検証をする。小・中学校における効果の検証に当たっては、5年生と8年生を抽出して行う。5年生については「国際コミュニケーション」のカリキュラムに沿って実施される授業のうち、テキストを使用した単元とテキストを使用しなかった単元を事後のアンケート調査により、比較することでテキストの効果を検証する。8年生については、実際にテキストを使用した後、その内容について生徒の感想を

中心にアンケート調査を実施して検証するものとする。

3. 検証の内容および成果と課題

○幼稚園における留意点の妥当性について

幼稚園において国際的コミュニケーション能力を意識した保育を実践するにあたっては、テキストに記載されている次の留意点(表1)を取り入れながら「自国・他国の文化や人、また様々なメディアに出会いながら好奇心とともにかかわる楽しさや喜びを感じることができる子ども」をめざして保育を行ってきた。

表1の留意点の妥当性については、留学生交流やマルチメディアの視点での保育を行った後、保育者によるアンケートにより検証を行うことにした。アンケートは、留意点を実際に取り入れてみて子どもたちに効果があったと感じられるエピソードや留意点を取り入れて反対に困ったことやうまくいかなかったことなどを記入するようにした。以下、各留意点の検証の結果を述べる。

【外国の先生と遊ぼう～留学生交流～】

留学生交流では、子どもたちに外国の人や文化に出会うことに楽しさを感じながら、自分なりの方法で積極的にかかわろうとする力を育みたいと考えている。

- ①生活の中で留学生に自分の思いを伝えやすくしたり、留学生を自分たちの遊びに誘いやすくしたりするという点で適であった。
- ②子どもたちの留学生への緊張を解き、親しみをもちやすくするという点で適切であった。特に留学生に対し緊張している子どもや初めて交流をする年少、

Naoko Murakami, Saori Matsuo, Takashi Minoshima, Kazushi Furo, Shinich Senoo, Daisuke Yagyū, Yoshika Oka, Koji Sanda, Hideo Kato, Yoshinobu Kobayakawa, Atsuo Nakashima, Shin Hayashibara, Shiho Kake, Tomochika Kimioka, Seiji Fukazawa, Yukiko Hirakawa, Masayasu Nagamatsu, Toru Yamamoto: The Efficacy of Self-developed Textbook in International Communication to Develop Universal Citizenship

年中児たちに効果があった。

- ③子どもたちと留学生が楽しさや面白さなどをわかちあうようになり、子どもたちが留学生を身近に感じることができるという点で適切であった。
- ④初めての交流の前日や新しい留学生が来る前日に④を取り入れると、子どもたちに交流への不安を和らげることができるという点で効果があった。また、継続的に同じ留学生と交流を行い、子どもたちが留学生に親近感をもっている時にも④を取り入れると子どもたちの交流への期待を膨らませるという点で大きな効果があった。
- ⑤保育者とともに子どもたちも留学生とのかかわりを楽しむようになり、留学生に興味をもって自分から積極的にかかわるようになるという点で適切であった。

表1 保育における国際コミュニケーションの留意点

<p>【外国の先生と遊ぼう～留学生交流～】</p> <ol style="list-style-type: none">①特別なイベントとしてのとらえ方でなく、留学生には、日常の保育の自然な流れの中に入れていただく。②保育者が、留学生に対して自然なかかわりをする事で、子どもたちが安心できる雰囲気にする。③子どもたちが留学生と同じ場所で過ごす心地よさを味わうことで、無理なく留学生と一緒に過ごすことができるようにする。④子どもたちには留学生が遊びに来ることを知らせ、当日を楽しみに登園できるように期待感を高める。⑤保育者が留学生との交流を心から楽しむ。 <p>【マルチメディアの視点での保育】</p> <ol style="list-style-type: none">①子どもたちの興味や関心にもとづきながら遊びが発展していく過程を大切に与える。②友だちに自分の思いを伝えたり、友だちの思いに気づき受け入れようとしたりする姿を大切に育む。③様々な素材を提示し、子どもの興味や関心を揺さぶるようにする。④子どもたちが発見したこと・驚いたこと・感動したことなどを自分なりの方法で楽しんで表現できるようにする。⑤保育者による身近なメディア機器の活用も実践に取り入れることで、情報との出会いが楽しいものになるようにする。⑥普段の遊びをマルチメディアの視点から捉え、身近な遊びの中から情報が変化することに気づける体験をさせるようにする。⑦身近なメディアに自然にかかわれるように、簡単なメディア機器の正しい扱い方を丁寧に知らせるようにする。

【マルチメディアの視点での保育】

幼稚園におけるマルチメディアの視点での保育は、驚きや感動をベースに、子どもたちがいろいろな情報

を感じ取ったり人とかかわったりしながら、ものの特性に親しんだり情報が変化することに気付いたりすることを大事にしている。

- ①子どもたちが遊びの中で工夫しようとしたり、試行錯誤したりすることにつながられるという点で適切であった。
- ②子どもたちの遊びのイメージが広がっていきたり、友だちからいろいろなことを気付かされたりすることができるという点で適切であった。
- ③素材の特性に気が付き、気付いたことを遊びの中に取り入れるようになるという点で効果があった。
- ④子どもたちの興味や関心が持続し、繰り返しかかわったり、友だちの情報に刺激を受けて遊びが広がったりしていくという点で効果があった。
- ⑤遊びの中でメディア機器と一緒に活用してみることでいろいろなことに気付いたり、友だちの発見や遊びに興味をもつようになっていくという点で適切であった。さらに、そのことから気付いたことや興味をもったことを通して、子どもたちの遊びが発展していくという効果があった。
- ⑥情報が変化することに面白さを感じ、いろいろなものの見方や考え方をするようになっていくという点で適切であった。
- ⑦メディア機器の正しい扱い方を知ることで、どの子どもたちも情報と出会うことの楽しさや面白さを感じるようになるという点で適切であった。

以上の結果から、マルチメディアの視点での保育の留意点が、実践するにあたって妥当なものであると考えている。

このように、幼稚園で留学生交流やマルチメディアの視点での保育を行ってきた結果、めざす子どもの姿に近づきつつあると感じている。小学校や中学校で行う国際コミュニケーションの授業では、留学生との直接交流やメディア機器を使った間接交流を行うことが多い。そういう時に幼稚園で育んできたことが活かされていくと考えている。

○5年生でのテキストの効果の検証

小学校5年生76名を対象に、質問紙による調査を行った。国際コミュニケーション科の5年生で扱われる「Welcome to our school」の単元は大きく2つに分けられており、前半、後半の2回交流学习が行われた。1回目の交流学习は2009年6月2日に行われ、2回目の交流は2009年7月7日に行われた。それぞれ、在日留学生との国際交流を通じて英語を使用したコミュニケーションを深めることが目的であり、交流学习の本番に向けて授業の中で、英会話や活動の練習と準備を行う流れであった。そこで、2回の交流学习の

うち、1回目はテキストを使用せずに行い、2回目はテキストを使用して行った。1回目、2回目のそれぞれの学習の最後に質問紙によって、授業の印象を調査した。これにより、テキストを使用した場合と使用しなかった場合の児童の印象を比較することで、テキストの効果を検証した。また、2回目の調査では、児童のテキストに対する印象を記述してもらった。

調査にあたり、国際コミュニケーション科を担当している教員2名によって、仮説として4つの因子を想定し、17問の項目を設定した。4つの因子は、テキストを使用した場合に教師側が児童に対して期待する効果を仮説とし、「学習の見通しの効果（5問）」「学習のまとめ・ふりかえりの効果（4問）」「家庭学習の効果（4問）」「カリキュラムへの興味（4問）」から構成した。

2回の調査とも全員の回答が得られた。そこで、授業の印象についての因子数を調べるために1回目の質問紙の回答を最尤法プロマックス回転により固有値1以上で探索的因子分析した結果、4回の反復で回転が収束し、累積寄与率は55.47%となり、2因子が抽出された。仮説とした4因子とは違う結果になったため、因子数を3、4になるように設定し、それぞれ因子分析を行うと適合度が0.215と0.523で、2因子の場合の適合度0.052を下回ったため、2因子構造が妥当であると判断した。最終的な因子分析の結果を表1に示す。

因子Ⅰには「ほかの学年の国際コミュニケーションの学習内容に興味がある」「学習で自分がやってみたいことを想像することができた」などの授業への関心を示す項目や「授業のあと、次にやってみたいことが思い浮かんだ」「他の学年の学習内容を早くやってみよう」など学習への意欲を示す項目、さらに、「自分で学習のまとめを行うことができた」「学習で自分がやってみたいことを想像することができた」などの自主的な学習活動を示す項目が構成されていることから、「関心・意欲」因子と名付けた。また、因子Ⅱには、「学習の手順を理解することができた」「学習の流れをつかむことができた」など、学習内容への理解を示す項目で構成されているため、「内容理解」因子とした。これらの因子の信頼性を検討するため、クロンバックのアルファ係数を求めたところ、「関心・意欲」因子で $\alpha = 0.87$ を、「内容理解」因子で $\alpha = 0.89$ を示した。

次に、2つの因子を単純合計したものを合成得点とし、1回目と2回目の得点を対応のあるt検定によって比較した結果、「関心・意欲」因子において2回目の調査で有意 ($t_{(75)} = 3.42, p < 0.001$) に高くなっていることが分かった。このことから、国際コミュニケーションのテキストの使用によって、学習への意欲や関心が高まり、自主的な学習への態度が養われることが

分かった。国際コミュニケーションのテキストの特徴は、幼稚園から中学校までの各学年での学習内容が含まれていることであり、そのことが他の学年の学習内容への興味や、次の学習が楽しみになる要因となったのではないかと推測できる。一方で「内容理解」因子では、有意な差は見られなかったことから、テキストを使用した場合でも、授業の内容理解には、差がないと言える。

2回目の調査の児童の記述には、「いろいろな内容や前にした6年生さんのやっているすがたを見て、流れがよく分かりました。」「1年、2年、3年、4年のときにやった勉強が書いてあってなつかしきがあるから良いと思います。そして、次のじゅぎょうや6年生になったらなにをやるのかが書いてあってうれしいです。」「留学生さんへの話し方や国際コミュニケーションの大切さが良く分かりました。これからも習ったことを活かしていこうと思いました。それで来年の突撃インタビューでもしっかり英語を使って行きたいと思いました。」など、他の学習への興味・関心や次の学習への意欲を感じるものが見られ、「関心・意欲」因子が高くなった結果と合致している。一方、「こまかくていねいに書いてあるので良いと思います。けれど、パソコンでやらないのに、パソコンでやるって書いてあるから、頭の中がゴチャゴチャになるので直したほうが良いと思います。」「教科書は書いてあることは分かりやすいけど一部のことしかのってないということがいけない。」などといった批判的なものも見られた。テキストがあることで児童の関心や意欲はある程度高められるが、テキストと違う方法で授業を進めることへの不満や、テキストには記載されていない単元があることは、児童にとって不満に感じる要素となることが示唆されている。実際に、5年生の単元では、行事などの関係で毎年授業時数に違いが生じており、本年度もパソコンを使った学習場面を簡略化せざるを得ない実情があった。このようにテキストを使用することの不満を児童に感じさせないためには、あまり細かな内容で記載せずに、活動の流れをつかませる程度のもののほうが、国際コミュニケーション科の学習内容には、適している可能性もある。また、内容をさらによく理解させるための手立てや、テキストを使用することで、理解したことが定着できるように改善する必要性もあると言える。児童の記述の中には「テキストを見たら、どんなことをどのようにどうやって行うかが理解できた。どうやったらいいかなんとなく分かった。」「面白く書いてあるので、楽しく授業を進めることができる。」という肯定的なものも見られたが、「内容理解」因子が高まっていないことから、課題が残っていると言える。

この調査では、小学校5年生を対象にテキストを使用した単元、使用しなかった単元の比較を行うことでテキストの効果を検証したが、他の学年あるいは、他の単元では検証を行うことができなかった。その結果、サンプル数が76に限定されてしまった。よって、他学年で、小学5年生と同じ因子分析の結果になるとは限

らない。また、この調査ではテキストを使用した単元が使用しなかった単元の後であったため、学習の順番の影響も十分に統制できていない。このような研究の限界は存在するが、この調査によって、国際コミュニケーションのテキスト使用によって児童の「関心・意欲」が高まるという効果は見られた結果となった。

表2 テキストの効果を測定する質問紙の因子分析結果（最尤法・プロマックス回転）

質問番号	項目内容	第Ⅰ因子 関心・意欲	第Ⅱ因子 内容理解
第Ⅰ因子：関心・意欲 ($\alpha=.87$)			
7.	授業のあと、次にやってみたいことが思い浮かんだ	.812	-.176
8.	自分で学習のまとめを行うことができた	.706	.083
12.	他の学年の学習内容を早くやってみたい	.694	-.031
5.	ほかの学年の国際コミュニケーションの学習内容に興味がある	.692	-.029
9.	学習で自分がやってみたいことを想像することができた	.652	.054
16.	学習した内容を家族の人に話した	.581	-.064
4.	次の学習で何をするのか楽しみだった	.544	.200
3.	家に帰ってから、授業で学んだことを思い出した	.534	.235
2.	学習後に、学習した内容を整理することができた	.496	.223
11.	授業の前に予習を行った	.487	.005
第Ⅱ因子：内容理解 ($\alpha=.89$)			
13.	学習の手順を理解することができた	-.144	.962
14.	学習の流れをつかむことができた	-.129	.866
15.	学習内容を思い出すことが多かった	-.045	.745
6.	授業で何をするのか、あらかじめ理解できていた	.085	.723
10.	授業で分からなかった内容を、後で理解することができた	.061	.692
17.	国際コミュニケーションで身につけなければいけない力が分かった	.227	.556
1.	単元が始める前に、これから何を学習するのかイメージすることができた	.291	.450

○8年生でのテキストの効果の検証

単元 Home Visit in OKINAWA

【単元の概要】

本単元は、修学旅行先の沖縄で、在住するアメリカ人家庭に半日滞在し、生活を共にする交流学習である。本校では、毎年12月に沖縄で修学旅行に出かけており、2日目にこの交流学習であるホームビジットを実施している。ホームビジットの学習には、文化や生活習慣を知る文化理解の要素と、英語でコミュニケーション

を図るための英会話向上の要素が含まれている。アメリカ人の家族と半日過ごす直接交流を通して、日本とアメリカの文化を比較してその相違に気づいたり、自国の文化の良さに気づいたりすることができる。また、学んだ英語表現を積極的に使うことによって、英会話能力だけでなく、自己表現力も高めることができる。このように、本単元は自国と他国の文化理解を深めるのに適しているだけでなく、語学力の向上にも効果がある学習であるといえる。

【テキストについて】

テキストには、過去、実際に行われたホームビジットの写真が載っており、どんなことをするか、という一例が載せてある。そして、英会話練習の書き込み式ワークシートがある。このワークシートは、現地で行われると予想される場面を設定しており、出会いから別れまでの必要最小限のフレーズを学習する構成になっている。また、その場面で気づく生活習慣の違いや文化理解の学習もできる。

【テキスト使用について】

まず、本単元がどのようなものかを「国際コミュニケーションテキスト」を使ってイメージさせた。そのあとテキストの流れに沿って学習を進めていったが、それだけでは不十分なので、補助教材としてワークシートを用いた。後は、学年実態などにあわせて、単元内容の活動を精選していった。例えば、日本的なもののお土産としては、それぞれが考えて用意するとあるが、今年度の生徒達にはちぎり絵を作らせた。

【テキストに対する生徒達の反応 〈アンケートより〉】

本年度は、2009年12月17日にホームビジットをおこなった。その後、学校に帰り、本単元のテキストに対する「いいと思うところ」と、「改善したいと思うところ」意見をまとめてみた。

表3 生徒たちから見たテキストを使って学習する上でのよさ

テキストのいいところ	8年1組	8年2組
その場を想定している	5	9
ワークシートがある	1	1
写真がある	11	15
イメージがわく	3	7
最低限のことは書いてある	1	5
カラー	10	2
キャラクターがいる	2	2
くわしくかかっている	2	1
わかりやすい	9	1
例が書かれてある	4	0
実際に書き込める	3	0

(アンケート実施 2009.12.24 アンケート人数=80, 記述式で複数回答可)

表4 生徒たちから見たテキストの改善点

もっとうしろに思っているところ	8年1組	8年2組
予想外に対応できない	4	4
体験記がない	5	5
内容が少ない	4	5
英会話が少ない	6	1
例が少ない	1	5
キャラクターが多い	3	1
ごちゃごちゃしている	2	2
くわしく書かれていない	5	3
写真が少ない	3	0
その他	8	13

【アンケートから】

一番回答が多かったのは、「写真がある」であった。視覚に訴える情報は、良いと回答している。現地でのイメージをもちやすく、意欲の向上にもつながると考えられる。改善点では、「体験記が少ない」とあった。困ったときにはどうすればいいか、どんなことに一番気をつければいいのかなどの対処法を、実際に体験した人からの声をもっと聞きたいということであった。また、テキストにある英会話ワークシートなど、「その場を想定して書かれてある」ので、良いと回答している一方、「想定外のことに対応できない」、も多く回答している。実際にホームビジットを終えてみて、自分たちが考えている通りにならなかったり、思っても見なかった場面に対して苦労したりしたようである。しかし、生徒たちにとって予想外のできごとに対する事前学習には限界があり、直接体験をする上では必ずぶつかる壁である。言葉以外のコミュニケーション（ジェスチャーや視覚的材料など）はどのようにとればいいのか、とか、聞き返す言い方や、確認する言い方などの場面がワークシートとしてあったらよかったかもしれない。



4. まとめ

幼稚園においては、留学生交流やマルチメディアの視点での保育を行ってきた結果、めざす子どもの姿に近づきつつあると感じている。小学校や中学校で行う国際コミュニケーションの授業では、留学生との直接交流やメディア機器を使った間接交流を行うことが多い。その際、幼稚園で育ててきたことが生かされていくと考える。さらに、保育者が外国の文化や言葉を保育の中に盛り込めるように、資料や留意点を加えることで、テキスト内容が一層充実すると考える。

小学校と中学校部分については、本研究から、児童生徒にとって、学習を身近に感じ、さらに見通しが持てるのがテキスト使用の最大の効果であったと考えられる。本テキストは各年齢、学年段階においての系統性のある主だった単元を載せたことがこの効果を生み出したと考える。本学園が独自に開発した単元のテキストであるということは、汎用性は求めることができない。テキストの一般化ということについても、今後の研究の視点の一つとなっていくであろう。

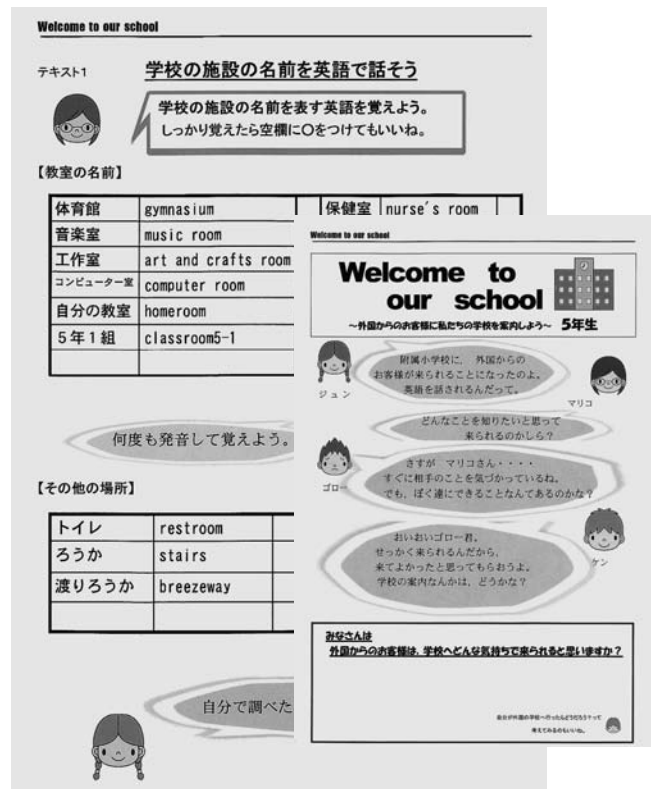


図2 5年生のページ

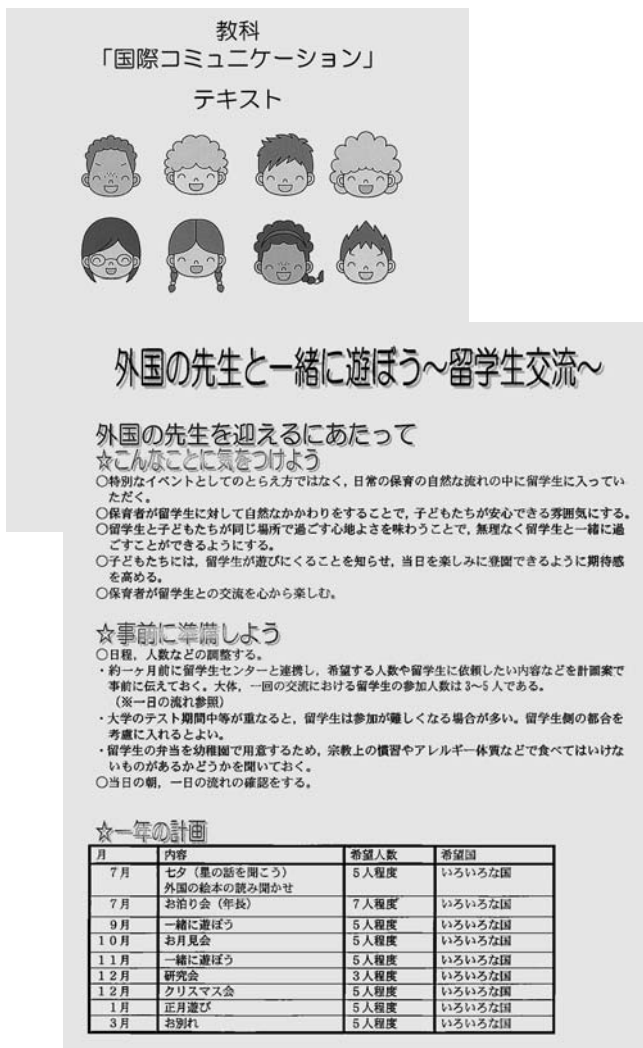


図1 テキストの表紙と幼稚園のページ



図3 8年生のページ

参考文献

1) 広島大学附属三原学校園編著(2008)「21世紀型教育への提言 幼小中一貫で育つ子どもたち」pp.22